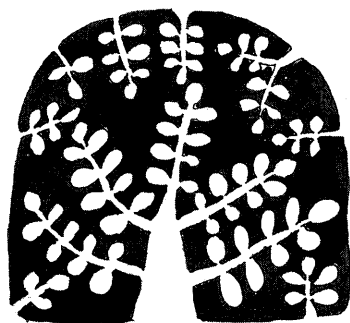


遠慮

松井 とし



A子の内面に変化が生じ、その事が彼女を生きにくくしているのではないだろうか。それまで集団の中で目立っていたA子の、いわば一匹狼的な強い個性はすっかり影をひそめ遠慮がちに生活している。

私たちがA子の変化に心を留めたのは二学期になった頃であった。三歳から文字を教えられたA子は、入園当初より言語面の発達が際立っていた。子どもにはふさわしくないような熟語を使い、大人との対等なおしゃべりを好み、姿が見えないと、年長児の部屋で一人本を読みふけていた。原色を基調にじつくりと描く、A子の濃厚な絵は、彼女自身をよく表していた。

一人でいることの多かったA子に、やっと年長児になって仲の良い友だちが出来た。陰と陽、タイプの違う者同士引き合うものがあつたのか。B子とは常に行動を共にするようになった。他の友達とのかかわりも増し「A子もまるくなつた」等と私たちは喜んだ。

そして二学期となり、子どもたちと活動を作り出していく時期になつたが、相談事を持ちかけてもA子は集団の中に埋没したまま、発言しようとしなない。あれ程に好きだつた絵もなおざりで集中せず、別人のような作品である。ある時こんな事もあつた。外へ遊びに行つていたA子が、しゃくり上げ大泣きをしながら室内にいた私の前を通り過ぎた。後からいぶかしげな顔をした女の子たちがぞろぞろついていった。

察するところこの出来事は、友達との関係を最優先したA子がついに自身を見失ひ心の葛藤を吐き出した事件のようであつた。短い冬休みの間にA子はよみがえつた。三学期の今、自分をとり戻したA子は生き生きしている。

一連の出来事はA子にとっては避けて通れなかつた試練とも言えるだろうか。妙な遠慮をせずに自分自身を出しながら、まわりの人達と協調して生きる。このことは、私たち大人にとつても重い課題である。

(神奈川県立教育センター)